

私は、世界が馬の腹から手を入れて、青い翡翠の石を取り出す。手に入れた色石を、夜の川面に放る。水面を、何度も跳ねて対岸に届くと、空の星が動いて、星座の配置が変わることもある。反動のためか、生きた小魚が霞の代わりに、町に降り出したこともあり、工場では、豚の腸詰をつめて売っていた缶に、色石もひそめて売ることにした。背骨に沿って刃物を入れて虎を捌き、喉元や肩や内臓から御影石や緑のガーネットをより分ける。どろんとした内臓をバケツに捨て、御影石をベルトコンベアに移す。緑のガーネットは、古い雑居ビルとビルの間のあつてないような隙間に沈めてから、干し芋に似た味がする細長い数棟のビルと豚の腸詰と一緒にして、女がつめた。

男たちが台の上で動物を捌き、女たちがラインに並んで缶詰に石と世界を詰める。猫の

肺から採れたダイヤモンドを添えた砂漠、羊の脳に埋もれていたサファイアが置かれた古城、リスの胃袋から採り出されたトパーズが地平線で巻かれた凶鑑、空に浮かぶ図書館の地下室に、サメの腸管から抜き取ったエメラルドが、そっと置かれると――女たちは、声を上げて笑った。

朝はラジオ体操だが、仕事の仕舞い時には、揃って経文を読むのが習いだ。野生の牛の群れから獲れた真珠を束ねた数珠を手にする。経文を唱え始めると、どこからともなく滝の流れる音が聞こえ、世界は虎の御影石が、私は、崩れていく。夏には、夕焼けの入道雲が光り輝く破片のように地に落ちていく。経文が終わりを迎える頃に、工場の壁や床が剥がれ落ちて、夜の海辺が現れる。先週は、都市の交差点が出たし、先々週は草原が出てきた。ぞろぞろと、同僚たちは、鹿や馬や犬やウサギに返り、砂浜でくつろぎはじめる。

私は、シャツを捌いた時に腹の中で見つけ

た三日月の欠片を食べることにした。亡くな
った工場長がよく、塩を振って、串刺しにし
てから火であぶっていた。白い魚がクレータ
ー状に所々陥没していて、塩焼きにすると鮎
を食べているように旨い。むしろむしろと輪
になって食べていると、豚たちが笑い始めた。
しばらくしてから、虎が静かに背後から豚た
ちに近づいていく。僕は虎の尻尾を、握った。
強く尻尾を握ると我に返る時があるのだ。

胸ポケットにある、青い翡翠の石だけは、
まだ缶詰に入っていない。翡翠は、青空の種
のようにも感じられて——波が押し寄せては
引いていく水泡のからからした音に耳を澄ま
せていた。口を濯ぎに行くのか、虎が海に入
っていく——私は、今日のこの出来事を、静
かに海辺で缶詰につめた。明日トラックで、
町に出荷される頃には、私も姿を消す。石も。
焚火だけが、海辺に残る。